

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その26)

堀
啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十六回目となるこのたびは、第三十一章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】【課題番号：24K0367021】による研究成果の一部である。

三十一章

太陽が、彼女の髪に飾られているバラの花と、その白い首の周りを明るく輝かせた。この青ざめた顔と、激しい恐れに満ちた黒い瞳へのこんな残酷な嘲りを、かつて太陽が照らしたことがあっただろうか？ ペアトリス・アールが手紙を読み進めるにしたがい、その唇

までもが青ざめて心臓が止まるかに思えるような、何とも言えない漠然とした恐怖が彼女を襲った。そしてその手紙を取り落とすと、彼女は長く低い鳴咽をもらして膝から崩れ落ち、両手で顔を覆った。ついに来てしまった——夢にさえも思わず、ありえないと思っていた残酷な嵐が。ヒュー・ファアーナリーが彼女を見つけ出し、彼女を自分のものだと言高らかに宣言したのだ。

彼女の誇り高い顔から幸福感と美しさを奪い去り、死人の顔のように青ざめた冷たさをもたらしたその手紙は、彼からのものだった。そして、その手紙の文言は情熱的な愛の言葉に満ちており、それが彼女を怯えさせた。その手紙はこんなふうに始まっていた。

「私のペアトリス、——危険に満ちた海と陸から私はあなたに求婚するために戻ってきた。あなたと別れてから、私はずっと最も恐ろしい姿の死と向かい合ってきた。あなたに会わねばならないとい

う思いから、私はその全てにうち勝ってきた。死は不変だと言うのは、ありふれた言葉だ。だが、死そのものは私をあなたから遠ざけることはできない——いや、もし私が死んで埋められたとしても、あなたが私の墓に来て、私の名前を囁いてくれたならば、きっとあなたの声が聞こえると思うのだ。

「ベアトリス、あなたは私の妻になると約束してくれた——あなたは私の期待を裏切ったりはしないだろう？ ああ、いや、あの青い空が、私の断末魔の目撃者になるなどと言う事はありえない！ あなたは、私のもとに来て言葉をかけ、微笑みながら、あなたが私に対してどれほど誠実でいてくれたかを示してくれるだろう。」

「昨夜、私はこの庭をさまよいながら、私の恋人の部屋はどこだろう、私のことを夢見てくれているだろうか、と考えていた。我々が、ナッツフォードの崖に腰をかけ、あなたが私の妻になると約束してくれてから、あなたの人生は変わってしまった。私はあの農園で、その大きな変化について全て聞き、緑の森を私とともに、小さな馬に乗って散歩した、あの若い女の子が、どのようにしてアール卿の令嬢になったのかを知った。あなたの家は疑いようもなく、由緒正しき家柄だ。あなたの家柄と地位は、ある種の恋人たちを怖気づかせるだろう——だが、私はその限りではない。あなたはそんなものを、私たちの間に立ちほだからせることはできない、あなたが口にしたあの約束の前では。」

「ベアトリス、私の航海は成功だった。私は裕福ではないが、あ

なたが心に望むほどのことならば、何でも叶えられるだろう。私はあなたを、日々が喜びに満ち、決して終わりを望まないような、海の向こうの日当たりの良い土地に伴うつもりだ。

「あなたからの指示を待っている。噂では、アール卿は、変わり者で失意の人だということだ。私はまだあなたの家には訪れない。私はブルックフィールドであなたからの返信を待っている。すぐに返事をくれ、ベアトリス。そして、いつどのようにしてあなたに会えるのか教えて欲しい。私はいつでもどこへでも行く。遅くならないうで欲しい——あなたの美しい顔をひと目見たいという渴望から、私の心は飢え、渴いている。すぐに約束がほしい。その返事が来るまで、私はどうしていただろう。それまで私のことをこう思っていてくれ。」

「あなたに全てを捧げた恋人、ヒュー・ファナーナリー。」

「ブルックフィールド郵便局気付。」

彼女はすべての文言を注意深く読み、ゆっくりと手紙を裏返してはまた読んだ。彼女の色を失った唇は怒りで震えていた。彼はどのようなしてここまで推測したのだろうか？ 彼の愛情！ ああ、もしヒューベルト・エアリーが、こんな言葉を読んではまったならば！ 彼女は彼を嫌悪した。彼女は、激しい憎しみを抱え、彼の名前の響きを忌み嫌った。どうして、この最も不運な若き日の彼女の過ちが、今彼女の目の前に立ち現れたのだろうか？ 彼女はもうしたら良いのだろ

う？彼女はどこで救済と相談相手を求められたのだろうか？

彼女が激しく嫌うこの男が、彼女の顔に触れ、彼女の手をキスと涙で覆ってしまったということがあり得たのだろうか？彼女はこの手紙を持っていた白く華奢な両手を大理石の台に叩きつけ、かつてヒュー・フアーナリーの涙が落ちたその手の美しい肌に青痣を作った。冷たく残酷な激しい言葉が、その美しい唇から漏れた。

「私は、何も見えていなかったの、馬鹿だったの、あるいは狂っていたのかしら？」と彼女は叫んだ。「ああ神よ、私をこの罪から救ってください。」

そして激しい怒りは絶望へと変わった。彼女はこうしたら良いのだろうか？どちらを向いても、望みはなかった。もし、アール卿に、彼女が彼を騙したのだと一旦知られたら、彼女は好きになりかけていたこの屋敷を追われるだろう。彼は、彼女のこんな秘密や裏切りや過ちを決して許さないだろう。彼女にはそれがわかっていた。もしエアリー卿に、誰か他の男が彼女のことを自分の恋人と呼び、その顔にキスをし、彼女は自分のものだと言ったということが知られたら、彼女はその愛情を失うだろう。このことも彼女には確かにわかっていて。

もし、彼女がアールズコートにとどまり、父親の愛情とエアリー卿の愛をつなぎとめようと思うならば、ヒュー・フアーナリーの事は彼らに知られてはならない。それは自明の理だと思われた。

彼をどうしたら良いのだろうか？買収すべきだろうか？お金で彼女の自由は購えるのだろうか？彼のプライドと情愛を思えば、それは無理だと思われた。彼の同情心に訴えかけるべきだろうか——心の中を打ちあけ、エアリー卿が彼女の人生の中心にあると告げるべきだろうか？彼の情愛に訴えかけて、同情をかうべきだろうか？

彼の情熱的な言葉を思えば、それは無意味だとわかっていて。彼が戻ってくる前に結婚してしまっていたならば——リントンのレディー・エアリーになってしまっていたならば——彼には彼女を傷つけることなどできなかっただろう。自分を手に入れられると思うなど、この男は狂っているのだろうか——イングランドで最も高貴な生まれの一人である男性を跪かせた、この自分を。この男は、彼女の由緒正しき偉大な苗字を彼のつまらない名前と、彼女の壮麗な生活とを彼の貧しい生活と、取り替えるうとも思っているのだろうか？

もはや考えている時間などなかった。夕食を告げる最後のベルが鳴り響き、彼女は食堂に下りて行かねばならなかった。彼女はその手紙を急いで引き出しに押し込み、鍵をかけると、鏡に向き直った。彼女は自分の変わりように驚いた。震える唇と、陰を帯びたまなざしの、その青ざめた顔は、どう見ても、彼女のものではなかった。彼女をぎよつとさせた恐怖と、言いようのない恐ろしい死人のような血色の悪さを、彼女はこうしたら取り除けるのだろうか？彼女が身に付けた薔薇は、ただ恐ろしいコントラストをもたらしたただけだっ

た。

「もつとうまく耐えなければ」と彼女は独り言を言った。「こんな顔をしていたら、秘密がもれてしまうわ。万事うまくいくのだから、こんなこと気にも留めていないと思うことにしましょう。」

彼女はこの言葉を大きな声で言ってみたが、その声はすっかり変わってしわがれていた。

「世の女性たちは、こんなことよりも、もつと恐ろしいことに直面してきたのよ。」そう彼女は続けた。「そして、打ち勝ってきたの。ヒューベルト・エアリー卿のためを思えば、私に耐えられない危険なんてあるかしら？」

ベアトリス・アールは、部屋を出た。彼女は、美しい頭をまっすぐ上げて、広い廊下を滑らかに移動し、広い階下の間に下りていった。彼女は、金銀の色にあふれて全てが美しく洗練され、配置されている贅沢なテーブルの席についた。だが、彼女の隣には、決して離れないように骸骨がつきまとっていた。それは彼女を苦しめる恐怖と、彼女に悲惨な思いをさせるみじめな過ちの意識だった。彼女は恐怖と心配から二度と自由になれそうにはなかった。

「ベアトリス」と、レディー・アールは、食事が終わると声をかけた。「あなたは慎重に振る舞えないのですね。」

彼女は仰天した。ようやく取り戻しかけていた美しい血色が、再び消え去った。

「そんなに驚く事はありませんよ。」と、レディー・ヘレナは続けた。「怒っているわけではないのです。あなたは今日あまりにも長時間、戸外にいたと心配しているのです。エアリー卿も、もつとあなたのことを気遣ってくださいさなくては。外は暑すぎましたし、あなたは弱っているように見えます。今夜のようなあなたは、見たことがありますよ。」

「日はほとんど照りませんでした。」ベアトリスは努めて陽気な様子で笑いながら答えた。「私たちは、公園の木陰で乗馬をしておりました。疲れてはいませんが、乗馬のせいではありません。」

それは、楽しい夕べで、紳士たちが居間でレディーたちの会話に参加する時刻になっても、まだ太陽が花や木々を照らしていた。大きな窓は開かれており、優しい夏の風が花々の香気を運んできた。

エアリー卿は、ベアトリスに歌うように頼んだ。話をすることができなかったたので、彼女はほつとした。すべての愛と悲しみ、そして彼女を苦しめている恐怖と絶望が、彼女の歌声に現れた。彼女は薄暮の中に座っており、エアリー卿は素晴らしい歌声に耳を傾けながら、すべての旋律に響く哀感と悲哀を不思議に思っていた。

「なんと奇妙な歌なのです、ベアトリス！」と、ついに彼は言っ

た。「あなたは愛を歌っているのですが、その愛は悲しみそのものです。あなたは、普段は明るく幸せそうに歌います。何があったのです？」

「何もありませんわ。」と彼女は答えたが、彼は彼女のほうに身をかがめて、その黒い瞳に宿る涙を見た。

「ああ」と、エアリー卿は叫んだ。「私の言う通りでしょう。あなたは本当に涙を流しながら歌っていましたね。」

彼は、彼女をピアノの前から、バラの花が顔を覗かせる大きな出窓へと伴った。彼は彼女の顔を穏やかな夕日へと向けさせ、彼女の美しい瞳を真剣に覗き込んだ。

「話してください。」と彼は率直に言った。「何があなたを悲しませているのです、ベアトリス、私には隠し立てをしないでください。あの夢のような『リーベンワールド』を歌っていた、つい今しがた、あなたは何を考えていたのでしょうか？すべての旋律が長いため息のようでした。」

「お話ししたらお笑いになりませんか？」と彼女は尋ねた。

「はい。」と彼は答えた。「ため息をつかないと言う約束はできませんが、笑ったりはしません。」

「私はもし——私たちが別れるようなことになったら、一体どうしたら良いのかと考えていたのです。」

「ですが、何も起きたりはしません。」と彼は言った。「死以外の何ものも、我々を分かつことはできません。もしあなたを失えば、自分がどうなってしまうのか、私にはわかっています、ベアトリス。」

「どうなるのです？」と、彼の端整な優しい顔を見上げながら、彼女は尋ねた。

「私は、自殺はしません。」と彼は言った。「なぜなら、命は聖なる贈り物だと考えているからです。ですが、どんな女性も私に対して微笑んだりしえないところへ行ってしまうことになるでしょう。なぜまたそれほど陰鬱な話をなさるのです、ベアトリス？結婚したらどこへ行きたいのか話してください——フランスですか、イタリア、あるいはスペインでしょうか？」

「何があっても、私は愛さなくなるという事はありませんか、ヒューベルト？」と彼女は尋ねた。「貧しい時も、病める時も？」

「はい。」と彼は応じた。「あなたが思ったり、考えたりする限りのことでは。」

「不名誉なことでは？」と彼女は続けたが、彼は半ば怒ったように彼女を遮った。

「いや！」彼は言った。「あなたの口からそのような言葉を聞きたくはありません。二度とおっしゃいますな。どんな不名誉があなたに関わると言うのです？あなたはあまりにも純粋で善良です。」

彼女は彼から顔を背け、彼は彼女の唇から低い呻きが漏れたように感じた。

「あなたは疲れているのです。そして——失礼ながらベアトリス——神経質にもなっておられるようです。」と、エアリー卿は言った。

「私があなたの医者となりましょう。この長椅子に横になつてください。西の空に傾いた太陽が見える方向に、椅子を向け直しましょう。そしてすべての悲しみを追い払ってくれるような何かを私がお読みしましょう。食事の間あなたは具合が悪く疲れていらつしやるようでした。」

彼は優しく、その長椅子を窓の方に向け、レディー・アールは微笑みながらその間、彼を見ていた。彼はベアトリスをそこに座らせ、日没の太陽が花々を美しく輝かせている庭の方へ、彼女の顔を向けさせた。

「さあ、楽しいものが見えるでしょう。」と、エアリー卿は言った。「そして、楽しいものが聞こえるでしょう。シラーの『メアリー・スチュアート』(ドイツの劇作家、フリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805)の史劇、スコットランド女王メアリーの生涯の最後の二日間を描いた悲劇)を、私がお読みしましょう。」

彼は彼女の足元に座り、その白い手を握り締めた。彼は、時には勇ましい戦いの音楽のように鳴り響く、偉大で感動的な作品を読んでいたが、それは一方ではまた絶望の淵に沈む魂の送葬歌のようでもあった。

彼のよく通る豊かな声は、この夕方の静寂に快く響いた。ベアトリスの視線は、真つ赤な西の空をさまよったが、彼女はヒュー・ファナリーのことを考えていた。

一体どうしたら良いのだろうか？もししばらくの間、彼女が結婚するまで時間稼ぎをし、彼をなだめることができたなら。彼はレディー・エアリーを、自分のものだとは言わないだろうし、もしそうしても何もできないはずだった。その上、彼女はエアリー卿に外国に行こうと頼むこともできた。そしてすべての追跡が無駄だとわかつたならば、ヒューは彼女を諦めるに違いない。最悪でもヒューベルトと彼女が結婚してしまえば、彼女は恐れる事はなくなるのだ。もし彼女が彼に全てを告白したとしても、彼は彼女を許すであろう。彼は激怒するかもしれないが、妻のことならば許すだろう。もし結婚前に彼が全てを知ってしまったらば、万事休すだ。

彼女はファナリーに対して時間を稼がねばならない——何も起らないような手紙を書き、彼が待たねばならないように告げるのだ。彼には拒否できないだろう。彼女はその夕べ、彼には何の望みも持たせないような、一方で、彼を絶望させることもないような手

紙を書くことにした。

「壮麗なシーンではありませんか？」と、突然エアリー卿は言った。そしてベアトリスの驚いた様子を見て、彼女が聞いてなかったことを知った。

「すぐに罪を認めますわ」と彼女は応じた。「考えていたのです——どうぞ怒らないでください——あなたの身に關することを。お読みになっていたところを、全く聞いておりませんでした、ヒューベルト。もう一度読んでいただけますか？」

「いいえ、やめておきましょう。」密かに面白そうに笑いながら、彼は言った。「朗読は解決策にはならないようです。話をしましょう。前にあなたがお答えにならなかった問題についてもう一度考えましょうか——新婚旅行はどこに行きましょうか？」

たった三日前、彼女は二十もの違う土地の名前を挙げたのだった。彼女は微笑み、頬を染めて、黒い瞳を輝かせていた。今、彼女は、恋人の計画を、幽霊の手が彼女の心臓をつかみ、すべての感覚を失わせてしまったかのように感じながら、聞いていた。

この夕べ、ベアトリス・アールは、ずっと一人になれないように感じていた。居間には、アールズコート的女主人たちが使ってきた

上品な小さな書き物机があった。だがここでは、エアリー卿がいつもそうしているように、何か手助けをしようとして、ずっと彼女の側にいるために、彼女は手紙を書くことができなかった。もし書斎に行くと、アール卿が彼女に、誰に手紙を書いているのかときっと尋ねるだろう。彼女は、自室に引き取るまで、何もすることができなさそうだった。

最初にレディー・アールが、彼女の体調を心配して、早く休んで静かに就寝した方が良くと勧めにきた。次にリリアンが、とても熱心に、ライオネル・ダッカーが誰よりもハンサムで優しいと思わなか、と彼女の意見を求めにきた。最後に、メイドのシュゼッテがいつまでもこの場に居続けるつもりなのではと思われるほど、彼女の側から離れなかった。

ついに彼女は一人になった。そして、ドアを閉ざすと外の世界を閉め出した。彼女はすぐに小さな自分の机に向かい、次のような冷たい手紙を急いでしたためた。そしてその手紙はほとんどヒューを狂わせそうになるようなものだった。

「親愛なるヒュー、あなたは本当に戻っていらしたのですか？あなたは、南シナ海で行方知れずになったか、あるいはナッツフォードでのあの他愛もない出来事を忘れ去ってしまったものと思っていました。今はまだあなたに会うことができません。お聞き及びの通り、アール卿は変わったところがあり——私は彼の意に背かないようにしなければなりません。またすぐに手紙を書いて、いっどこで

お会いできるかお知らせします。かしこ。ベアトリス・アール」

彼女は、この手紙を折りたたみ、彼が望んだ通りに表書きを書いた。そして部屋を出ると、郵便袋がテーブルの上の口を開けて置いてあるホールへと下りていった。彼女は、この信書を、誰かに見られてしまうようなトラブルを避けるために、袋の奥のほうに入れた。そして来た時と同じように、静かに部屋に戻った。

この手紙は、翌日の昼に、ブルックフィールドに届いた。ヒュー・ファーナリーはこの手紙を開封すると、怒りで唇を噛んだ。冷たく、心ない文面！歓迎の言葉は一言もなく、彼が命を落としかもしれないことへの悲しみの言葉もない。愛や誠意や忠誠の言葉もなく、彼女は彼のものになると言う約束の言葉もない。この手紙は何を意味しているのだろうか？

あれほど愛したこの女性を、彼はほとんど嫌いになりそうだった。だが、おそらくは、彼の長い留守の間に、彼女があまり彼のことを思わなくなってしまったのだろうと考える以外の事は彼にはできなかったし、これからできそうにもなかった。彼女は、彼の妻になると約束したし、何が起ころうと、彼はこの約束を彼女に守らせるつもりだった。

そう告げたように、ヒュー・ファーナリーは本気だった。彼は自分の人生の全てを彼女にかけていたし、易々と彼女を諦めるつもりはなかった。

手紙は送り付けられ、ベアトリスは、筆舌には尽くしがたい不安な思いで返事を待っていた。時には、なぜ彼女がこんなに苦しまなくてならないのか、と言うぼんやりとした疑問が浮かんできた。他の娘たちも、彼女がしたのと、同じようなことを——いや、五十倍も悪いようなことを——しているはずだが、ネメシス(ギリシア神話で人間の悪いあがりに対する神罰を擬人化した女神、復讐の女神)は、彼女らのもとはは赴かないのだった。この恐怖と地獄の幽霊はなぜずっと彼女の側に立っていて、彼女を苦しめ続けるのだろうか？

あのきれいな森と、あの海岸で、この厄介なヒュー・ファーナリーと会っていたことが、彼女の大きな過ちだったのは確かだった。だが、毎日が死にそうになるほど退屈だったあの単調な生活を、その出会いが変えてくれたのだ。彼の情熱的な愛情は楽しいお世辞で、まだ彼女は何も深刻に受け止めていなかった。彼にとっては、それが生死に関わるほどの出来事であつたとしても、彼女にとってそれは単に目新しい、そして楽しい出来事でしかなかった。だが、彼女はアール卿を欺いた。もし彼が彼女に尋ねたとき、そしてあの優しい叡智で彼女の信頼を勝ち得ようとしたときに、彼女がこの話をしていたら、彼はこの酷い苦しみと彼女自身の過ちの結果から、彼女を救いだし、彼女がエアリー卿を愛するのに、何の禍根も残さなはずだった。

今ではもう難しかった。もしアール卿に話したとしても、よく考えられた強い語調で話をされた後に、何の慈悲も期待することはでき

きないだろう。そして彼女は自身に言いきかせた。他の娘たちとはも
っと悪いことをしていても、それほど簡単に罰は受けていないはず
だ、と。

考えることに苦しみ、疲れきって、ついに彼女は眠りについた。

(以下、次号)

翻 訳

Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (*Dora Thorne*)』

(翻訳・その 26)

堀 啓子

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame ②6

HORI, Keiko